

## 「分かっていないということ、分かっておくということ」

21S1155 渡邊怜子

鈴木大介さま

ご講義拝聴しました。私は訪問看護師をしまして、今まで脳梗塞後遺症の方々とは数えきれないほど関わらせていただいています。高次脳機能障害は本当によく耳にするのですが、よく理解しないまま関わっていたのだと反省しました。お話、大変参考になりました。ありがとうございました。

ジャーナリズムのお話に触れた際に、「当事者の話にエビデンスとして医療者のコメントを付けるが本当にエビデンスか？」とおっしゃっていて、とても共感しました。私は一医療者ですが、私たちがどんなに頑張ってもアセスメントしたとしても、ご本人の、不調に対する「自己診断」に勝るものは無いと感じます。医療者がエビデンスを語ることは難しいです。体験していない以上、机上の空論であることも沢山あると思います。医療者として、自分は正しくない、全て分かっているわけではない、ということをお話前提に関わるのが大事だと思いました。

パニックや過呼吸、フラッシュバックなど、症状として聞いたり見たりしたことがあっても、ご本人がどれだけ苦しめられているかというのは当事者でない私には、理解しきれないことだと思います。「フラッシュバックが辛い」と言われたことはあるのですが、何がどう辛いのかイマイチ理解できず、「いつも辛いつて言うけど、別に辛そうでもないし・・・、ホントに辛いのかな？」とまで思ったことがあります。自分の不調をうまく説明できないこともあるということで、目が覚めるような思いでした。

最後に、私事になり恐縮なのですが、私の親も神経膠芽腫と診断され、2回の手術を経て、少しずつ、違う人のようになっている、という経験をしています。まさに高次脳機能障害の状態、正直、戸惑うこともあります。何が出来て、何が出来ないのか、まだ手探りです。鈴木さんが「急性期に鈴木大介という人間はもういないと言われた」とおっしゃったのは印象的です。私も親に対して、手術後に同じように思いました。でも、「残っていること」を探すことの大切さを、教えていただきました。実践してみようと思います。